

# アラビア語チュニス方言の VS 構文による語りの構造化

熊 切 拓

東京大学大学院人文社会系研究科研究員

**【要旨】** 本稿では、アラビア語チュニス方言において動詞-主語の語順となる VS 構文の機能について、物語テキストを対象として分析を行った。まず、登場人物などが主語となる VS 構文が、「場面の主役」、場面の「場所」・「時間」を設定し、前景の語りにおいて場面転換のきっかけとなる用法について検討し、さらに物語での実際の語りに即してその用法を確認した。次いで、この場面転換という用法が、VS 構文のもつ thetic な新情報提示という機能に由来することを論じ、VS 構文、SV 構文、V 構文の前景の語りにおける機能の違いを明確にした。また、情報構造の観点からこの場面転換の VS 構文を論じ、この構文を、語りの内容についての情報を伝達するという共通基盤コンテンツ的側面と、語り方についての情報を伝達するという共通基盤マネジメント的側面から分析した。そこで、「場面の主役」の転換が VS 構文によってなされる場合と、なされない場合があることを、この共通基盤マネジメントという観点から説明した\*。

**キーワード：**アラビア語、動詞文、語順、共通基盤、前景の語り

## 1. 本稿の概要

本稿では、アラビア語チュニス方言において動詞-主語の語順となる VS 構文の機能について、物語テキストを対象として分析を行う。第2節では、対象となる言語と資料について述べる。第3節では、VS 構文の機能に関して先行研究を踏まえて課題を述べる。第4節では、物語資料における VS 構文の用例を検討し、VS 構文が前景の語りにおいて場面転換を引き起こす場合があることを指摘する。第5節では、この機能を物語の文脈の中で検証する。第6節では、VS 構文の本来的な機能と、前景の語りにおける他の動詞文との機能の違いを論ずる。第7節では、VS 構文の場面転換機能について共通基盤マネジメントという情報構造的な観点から議論する。第8節では、本稿の議論をまとめ、課題を述べる。

\* 本稿は、日本言語学会大会第161回大会（2020年11月21日、オンライン）での口頭発表「アラビア語チュニス方言の VS 構文による語りの構造化」を発展させたものです。発表において有益なコメントをくださった方々に感謝申し上げます。また、発表後、チュニス方言の VS 構文について、時崎久夫先生には thetic な陳述との関連を、塩原朝子氏には event focus との関連を、ご指摘いただきました。これらのご指摘は、第6節の執筆にあたり有益でした。ここにお礼を申し上げます。本稿はまた、2名の匿名の査読者よりいただいた多くの助言のおかげで、構成、内容、表現において改善されました。心より感謝申し上げます。言うまでもなく、残された不備はすべて著者自身の責任です。なお、本研究は JSPS 科研費 19K13183 の成果の一部です。

## 2. アラビア語チュニス方言の概要と資料

アラビア語チュニス方言<sup>1</sup>（以下チュニス方言）は、現代アラビア語諸方言のひとつであり、チュニジア共和国の首都チュニスを中心にコイナーとして広く用いられている（Gibson 2009）。チュニス方言は、もっぱら話し言葉として用いられる。書き言葉や印刷物で用いられることは非常に少なく、文語として圧倒的に優位な現代標準アラビア語よりも社会的地位の劣る言語とみなされている。

資料として、『アル＝アルウィー物語集』（Al-ʿArwi, ʿAbd-al-ʿazi:z (1989) *bika:ja:t al-ʿArwi*: Vol. I-IV. 2nd edition. Tunis: Al-Da:r Al-Tu:nisi:ja li-l-Naʿr) を利用した。本書は、各巻 20 話から 30 話を収録した、総話数 111 に及ぶ短編物語集であり、すべてがチュニス方言で記されている（ただし、各話に付された語釈は標準アラビア語<sup>2</sup>である）。物語の内容は昔話、お伽話、寓話、教訓物語、笑い話、歴史物語、翻訳物語などである。

作者は、作家、ジャーナリスト、ラジオ番組担当者として知られる ʿAbd-al-ʿazi:z Al-ʿArwi: (1898-1971) である。アル＝アルウィーは、草創期からチュニジアのラジオ放送に関わり、長年にわたり番組に出演したが、その特筆すべき活動が、チュニジアで語り継がれてきた物語をチュニス方言で語るプログラムである。標準アラビア語の使用が優先される公共メディアにおいて、方言で民衆的な土着の物語が語られること自体特異なことであったが、まさにその理由により、このプログラムは好評をもってチュニジア社会に迎えられた。

『アル＝アルウィー物語集』は、ラジオ番組で語られたこれらの物語の主なものを、アル＝アルウィーの死後に編集・出版したものである。詳しい成立事情については記されていないが、インターネット上に流布している音声資料と一致しない箇所がしばしばあることから、ラジオ放送における即興の語りの記録というよりは、放送のために準備された原稿をもとにしている可能性が高い<sup>3</sup>。生きた言語をそのまま記録したものではなく、「語り手」であるアル＝アルウィーの個性が反映されたテキストという面もあるが（この点に関しては第 8 節で触れる）、「ラジオ番組において

<sup>1</sup> Singer (1984: 37-6) と Gibson (2009: 563-564) に基づき、32 種の子音 (/b, bʰ, m, mʰ, f, θ, ð, ðʰ, t, tʰ, d, n, s, sʰ, z, zʰ, r, rʰ, l, lʰ, ʃ, ʒ, k, g, x, ʕ, q, h, ʕ, h, w, j/) と、長短合わせて 6 種の母音 (/i, a, u, i:, a:, u:/) を設定する。Gibson は子音目録に /nʰ/ を加えているが、彼自身認めているように、非常に稀なため、本稿では含めなかった。これ以外にも、標準アラビア語やフランス語などからの借用語に現れる音もある。

名詞のクラスは男性 (M)・女性 (F) に分かれ、単数 (SG) と複数 (PL) の区別がある。動詞には完了形 (PERF) と未完了形 (IMPF) の 2 つの活用系列があり、人称・数・性によって活用する。本稿で用いる略号は次のとおり。1/2/3: 1 人称, 2 人称, 3 人称, DEF: 定冠詞, F: 女性, IMPF: 未完了形, IRR: 非現実モダリティ辞, M: 男性, NEG: 否定, PERF: 完了形, PL: 複数, SG: 単数, -: 形態素境界。

<sup>2</sup> 本稿では、方言ではないアラビア語（古典アラビア語と現代標準アラビア語）を標準アラビア語と呼ぶことにする。

<sup>3</sup> アル＝アルウィー自身の発言によれば、彼は長い時間をかけて放送のための原稿を準備していたという (Turki 1988: 142)。

チュニス方言で語る」という目的に沿って製作されたという点で、チュニス方言による実際の語りをかなりの程度反映させたテキストといえる。

『アル＝アルウィー物語集』に収録された物語のうち、本稿では、第1巻の最初の物語にして全4巻中最長の「ランプよ、ランプ (mnajjra ja:-mnajjra) <sup>4</sup>」(本文は pp. 9-66, 総ページ数 58。なお, pp. 67-92 は標準アラビア語による語釈)と、第1巻の3番目の物語「黒い商人 (it-ta:zir l-akhal) <sup>5</sup>」(本文は pp. 113-127, 総ページ数 15, 語釈は pp. 129-133) の2つの物語を取り上げる。この2つの物語を取り上げたのは、主人公が初めから終わりまで常に動き回るタイプの物語よりも、複数の登場人物が入れ替わり立ち替わり活躍するタイプの物語のほうが、本稿が論ずる「場面の主役」の転換をよく観察できるからである。

これらの物語を含む資料についての調査は、2001年2月から3月にかけてチュニスにおいて、Wāsil Kūr 氏 (チュニス生まれの男性、調査当時は30代) を調査協力者として行った。本稿は、その調査で得た語彙・文法情報、および氏による朗読の録音<sup>6</sup>に依拠している。『アル＝アルウィー物語集』第1巻からの引用にさいしては、訳文末の [] 内にアラビア数字でページ番号 (p.) と行番号 (l.) を記した。

### 3. チュニス方言の VS 構文の機能に関する先行研究

チュニス方言の動詞を述語とする文 (以下「動詞文」と呼ぶ<sup>7</sup>) は、動詞 (V) と主語 (S) の関係から、(1) に示した3つの型に分類できる。比較のため、動詞が qa:l<sup>8</sup> 《言う》であるものを集めた。

- (1) a. VS 構文 fi-θ-θni:ja      qa:lt-ilha:      l-aʕru:sa  
 中 -DEF- 道 言う PERF.3SG.F- 彼女に DEF- 花嫁  
 「道すがら、花嫁が彼女に言った。」 [p.20,1,3]
- b. SV 構文 si-t-ta:zir      l-akhal      qa:l-lu:  
 敬称 -DEF- 商人 DEF- 黒い 言う PERF.3SG.M- 彼に  
 「黒い商人殿は彼に言った。」 [p.115,1,9]
- c. V 構文 qa:l-lu:      tilʕab-ʕi:      ʃ-ʃitʕranʒ  
 言う PERF.3SG.M- 彼に 遊ぶ IMPF.2SG-IRR DEF- チェス

<sup>4</sup>「ランプよ、ランプ」の粗筋：貧しい母と3人の娘の家に謎めいた男が求婚に来る。男は上の2人と次々に結婚するが、追い返す。最後に3番目の娘と結婚する。2人の姉は、男から自分の運命の相手について聞き、それぞれの結婚相手を探し出すため、長く危険な旅に出る。

<sup>5</sup>「黒い商人」の粗筋：異国で「黒い商人」と呼ばれる男に騙されて奴隷となった夫を救い、黒い商人に復讐するために、妻が男装して旅立つ。

<sup>6</sup>2つの物語のうち「黒い商人」については、アル＝アルウィー自身の語りとされる音声記録がインターネット上で入手できるが、刊行されたテキストと異なる点もあるため、本稿では Wāsil Kūr 氏のテキスト朗読を利用する。

<sup>7</sup>アラビア語学の伝統においては、「動詞文」は「動詞で始まる文」を意味するが、本稿では「動詞文」を述語が動詞によって作られる動詞述語構文を指すものとする。

<sup>8</sup>セム語学の慣習に則り、動詞を示すときは3人称単数男性の完了形を用いる。

「彼(黒い商人)は彼に言った。『あなたはチェスはやりますか?』」  
[p.114,1.15]

これらの文の動詞は、いずれも主語に一致した主格人称を含む活用形である。(1a)では、独立した主語が主格人称を含む動詞句の直後に現れている。本稿では、このように動詞(句)－主語という語順で現れる動詞文を「VS構文」と呼ぶ。いっぽう、(1b)は(1a)とは逆に、動詞句の直前に独立した主語が現れている。これは、本来は動詞の直後にある主語が主題化されて動詞の前に現れたものと考えられる(熊切2018)。本稿ではこうした主語が主題化された動詞文を「SV構文」と呼ぶ。この2つの構文に対し、(1c)のV構文は動詞活用によって主格人称が示されるのみで、独立した主語はその前後には現れない。この場合、動詞形によって示されている主格人称は3人称単数男性であり、文脈から「黒い商人」という主語を指示していることがわかる。

物語「ランプよ、ランプ」では、主文の主動詞として動詞が1,426回現れているが、動詞の前後に主語が現れないV構文がもっとも多く、1,102例であった<sup>9</sup>。いっぽう、VS構文は151例<sup>10</sup>、SV構文は164例であった<sup>11</sup>。物語「ランプよ、ランプ」においては、動詞文は独立した主語が現れないV構文が一般的であり、独立した主語がその直前・直後に現れる動詞文(VS構文とSV構文)はなんらかの特定の機能を有する動詞文といえる<sup>12</sup>。

これらの3つの動詞構文は、それぞれどのような機能を持つのだろうか。VS構文とSV構文の違いについていえば、チュニス方言のこの2構文の機能とその違いを論じたものは管見の限り存在しないが、標準アラビア語についてはHoles(1995: 204-209)とDahlgren(2009b: 728-729)の研究がある。

Holes(1995: 204-209)は、標準アラビア語の主語と動詞の語順について論じ、新聞においては、“VSCOMP”(動詞－主語－補語となるVS構文)は「誰が何をした、何が起きた、どう起きた」に焦点を当てる「出来事志向(event-oriented)」であり、“SVCOMP”(主語－動詞－補語となるSV構文)は出来事の背景やテキスト上ですでに述べられた対象について説明する「属性志向(entity-oriented)」であるとする。また、Holes(1995: 211-213)は、ダマスカス方言とバハレーンの一方方言の語りにおけるVS構文とSV構文の違いを若干のテキストを挙げて分析し、ダマスカ

<sup>9</sup> 接続詞w-で連結された複数の動詞も主動詞である限りは、まとめて1例とせず、別々に数えた。接続詞w-による連結は、特にV構文に特徴的であり、こうした事情もまたV構文の数を増やしている。

<sup>10</sup> VS構文のSのあとに、接続詞w-で別の主語が連結されるが、動詞ははじめの主語にのみ一致するという構文がある。この構文の機能は不明であるため、本稿では通常のVS構文に加えなかった(p.20,1.3の“w-rikbit hi:ja w-lilla:-ha:”。また「黒い商人」ではp.114,1.1など)。

<sup>11</sup> 残りの9例は、目的語や前置詞補語が主題化された動詞文と注10で言及した動詞文である。

<sup>12</sup> 動詞文の数え方や、物語のタイプにより、「V構文」対「VS構文・SV構文」の比率は変りうるが、それでもV構文が多数を占めることには変りがないと考えられる。

ス方言においては VS 構文が主たる出来事を述べるのに対し、SV 構文がその出来事の状態を述べることを、また、バハレーンの方言では、VS 構文が話を進行させたり全体的状況を語ったりするのに対し、SV 構文は出来事の詳細や影響を語ることを指摘している。標準アラビア語とダマスカス方言、バハレーンの方言とでは、VS 構文と SV 構文の機能には若干の違いが認められるものの、VS 構文は出来事を述べ、SV 構文はその出来事についての背景や情報を述べるとまとめることができよう。チュニス方言の VS 構文と SV 構文がもつ構文としての機能は第 6 節で議論するが、この 2 つの構文に関する Holes の見解は、チュニス方言の VS 構文の一次的機能としての *thetic* な性質、そして他の文との関係において文を述べる SV 構文の機能に関連するものといえる。

Dahlgren は、語りにおける機能という観点から、VS 構文は前景の語り (*foreground discourse*) に、SV 構文は後景の語り (*background discourse*) に関わると主張する。Dahlgren のいう語りの前景と後景とは、Hopper (1979) に依拠するもので、前景の語りは語りの骨格をなす本筋の出来事を語ることで、後景の語りは本筋の背景を説明したり補足したり、本筋についてのコメントを述べることでであるとされる。

チュニス方言においても、Dahlgren の見解は全面的ではないが当てはまる。物語「ランプよ、ランプ」の例である (1a) の VS 構文は、主要登場人物である花嫁が女召使いにある指示を与えることを述べるものである。これは本筋に含まれる出来事であり、前景の語りとなる。いっぽう、物語「ランプよ、ランプ」や「黒い商人」における後景の語りは、例としては後出の例文 (6) のような状況説明、あるいは出来事についての背景説明や補足的な描写であるが、これは前景の語りと組み合わせられてひとつの語りを構成している。こうした後景の語りにおいてしばしば見られるのが、SV 構文が前景となる出来事についての描写を述べる例<sup>13</sup>である。

ただし、チュニス方言において SV 構文が常に後景の語りに現れるわけではない。(1b) は「黒い商人」からの引用である。(1c) のチェスの誘いをきっかけに二人のやりとりが始まり、(1b) の「黒い商人」の「彼」に対する発言によって「彼」が「黒い商人」の計略に陥れられる過程が描かれている。(1b) の SV 構文も本筋に関わるものであり、前景の語りを担っていると考えられる。前景を語る VS 構文に対する後景を語る SV 構文という見解は、少なくともチュニス方言の「ランプよ、ランプ」の語りにおいては当てはまらない<sup>14</sup>。

<sup>13</sup> 例としては、放置された買い物籠の腐敗ぶりを描写する「虫が這っている」の SV 構文 (p.14, 1.1) や、3 人の娘が料理を手伝っている様子を描写する「あるものは肉を切り、あるものはスパイスを挽き、あるものは料理の腕を振るう」での 3 つの SV 構文 (p.25, 1.7) が挙げられよう。

<sup>14</sup> この点に関しては、分析の対象とするテキストの違い (Dahlgren 2009b: 727v) や、方言の違いが影響している可能性がある。Dahlgren (2009b: 729r) によれば、シリア、レバノン、ヨルダン、パレスチナなどの東部地中海諸方言、ベドウィン方言、メソポタミア方言、エジプト方言では、VS 構文と SV 構文の違いは、語りにおける前景と後景の違いに対応するが、一部のエジプト方言とアナトリア方言はその例外であるという。また、Dahlgren の挙げた

このように、Holes と Dahlgren の VS 構文と SV 構文の機能についての見解は、チュニス方言の VS 構文と SV 構文の機能にもある程度当てはまるが、この 2 つの研究には、動詞形の影響と、V 構文の位置づけという 2 つの問題がある。

まず、動詞形の影響から検討する。標準アラビア語とその諸方言の動詞には完了形と未完了形があり、完了形が完結性、未完了形が非完結性・進行性をあらわすとされる (Holes 1995: 177)。Holes がダマスカス方言、バハレーンの方言の VS 構文と SV 構文としてあげた例を見ると、ダマスカス方言では VS 構文はすべて完了形、バハレーンの方言では 5 例の VS 構文のうち、3 例が完了形である。これに対し、SV 構文は、ダマスカス方言では未完了形と能動分詞、バハレーンの方言では未完了形となっている。能動分詞がダマスカス方言でどのようなアスペクトをあらわすかは不明だが、方言では事態の進行を意味することが多い。Dahlgren (2009b: 733) もシリア、レバノン、ヨルダン、パレスチナなどの東部地中海諸方言について、VS 構文が完了形、SV 構文が未完了形である傾向について指摘している。

チュニス方言においても同様の傾向が観察される。物語「ランプよ、ランプ」における語りの地の文に現れた VS 構文は 117 例であり、そのうちが 109 例が完了形であった。これに対し、地の文の SV 構文は 115 例あり、そのうち完了形は 56 例で、未完了形がやや多かった。方言においては、VS 構文では完結性をあらわす完了形が、SV 構文では非完結性・進行性をあらわす未完了形が優勢であるということになる。ここには、VS 構文と、SV 構文という機能の違いに、動詞の完了形と未完了形の違いが関与している可能性がある。完結した出来事を述べるのが完了形ならば、完了形の優勢な VS 構文が出来事を述べる、あるいは前景の語りを担う構文となるのは当然である。また、未完結・進行性的事態を述べるのが未完了形ならば、未完了形の優勢な SV 構文が属性を述べたり、後景の語りにおいて状況や背景を述べるのも当然ということになる。それゆえ、語順の観点から VS 構文と SV 構文の機能の比較をする場合は、動詞形と語りにおける機能を揃える必要があるが、Holes と Dahlgren の研究ではその点について十分な配慮がなされていない。これは両者の対象とした方言において、前景の語りを担う完了形の SV 構文が少なかったためかもしれないが、チュニス方言においては、上述の通り SV 構文の半分が完了形であり、また (1b) のように前景を担う完了形の SV 構文も存在するため、VS 構文との比較にさいしては動詞形と語りにおける機能を揃える必要がある。

Holes と Dahlgren の見解のもうひとつの問題は、V 構文についての言及はあるものの、その機能については議論されていないことである。チェスの誘いを述べる (1c) の V 構文は、(1b) の「黒い商人」の「彼」に対する発言につながるものであり、少なくとも VS 構文と SV 構文と同じく前景の語りを担っており、この構文には何

---

諸方言にはチュニス方言などの北アフリカ諸方言が含まれていないことを考えると、チュニス方言の VS 構文と SV 構文の機能についてさらに検討する余地は残されていない。なお、Dahlgren のこの指摘は、査読者のご教示による。

らかの機能があると考えられる。

V 構文の構文としての位置づけも考慮する必要がある。ひとつの可能性として、V 構文は VS 構文の S の省略されたものであり<sup>15</sup>、S が文脈上明らかなきときは VS 構文は V 構文となるといえるかもしれない。この場合、V 構文は VS 構文の下位構文となり、機能上の違いは存在しないこととなる。しかし、文脈上、動詞の主格人称が特定の主語を指示していることが明らかで、主語が省略可能であるにも関わらず、VS 構文として主語が明示される場合がある。それが次にあげる (2) である。(2) は、男性と女性の 2 人の登場人物しかいない場面の文である。ここでは、性の異なる人物しかいないため、動詞の主格人称のみで誰の行為かは充分区別できる。しかし、こうした場合でも、VS 構文が現れている（以下の例文では VS 構文を太字で示す。日本語訳では、VS 構文であることは文頭の太字の [VS] で、V 構文であることは活用形で示される主語を [V 主語は] と記すことで示す）。

- (2) **dxal**                      **l-aʕru:s**      la:      kla:m la:      sla:m  
 入る PERF.3SG.M DEF- 花婿 NEG 言葉 NEG 挨拶  
 sʕalla:                      rakʕti:n      w-za:  
 礼拝する PERF.3SG.M 2 回      そして - 来る PERF.3SG.M  
 ʕa-l-bank                      w-tmadd                                      rqaḍ  
 の上 -DEF- 長椅子      そして - 横になる PERF.3SG.M      寝る PERF.3SG.M  
**nahha:t**                      **hi:ja**      **hwa:jɜ-ha:**      w-tʕalʕat  
 脱ぐ PERF.3SG.F      彼女      着物 - 彼女の      そして - 上がる PERF.3SG.F  
 raqdit                      fi-l-farʕ  
 寝る PERF.3SG.F      の中 -DEF- ベッド  
 「(娘が男の家で待っていると) [VS] 花婿 (= 男) がひとと言も言わず入ってきた。[V 彼は] 2 回礼拝をした。そして [V 彼は] 長椅子に上がった。[V 彼は] 横になった。[V 彼は] 寝た。[VS] 彼女 (= 娘) が着物を脱いだ。そして [V 彼女は] ベッドに上がった。[V 彼女は] 寝た。」 [p.11, 1.12]

ここで問題となるのは 2 番目の VS 構文（「彼女 (= 娘) が着物を脱いだ」）である。ここでは女性はこの「娘」だけであることが文脈上明らかだが、V 構文ではなく、VS 構文によって「娘」が主語であることが明示されている。明示された主語が独立形の人称詞であることも重要である。動詞にはすでに活用形として主格人称が表示されており、独立した人称詞によって主語を明示する必要はないので、ここでは主語をあえて人称詞にしても VS 構文を使う理由があったと考えられる。つまり、VS 構文には V 構文とは異なる独自の機能があり、その機能がここに関与しているということである。

<sup>15</sup> SV 構文では S が主題化されていることを考えると、V 構文が SV 構文の S のなくなったものとは考えにくい。

本稿では、先行研究とは異なり、VS 構文、SV 構文、V 構文が、それぞれなんらかの機能を持つ独立した構文であると考え、次節以降では、この VS 構文の前景の語りにおける独自の機能について物語テキストの分析を通じて検討する。そして、それを踏まえて、第 6 節でこれら 3 構文の前景の語りにおける機能の違いについて論ずる。そのさいには、動詞形と語りにおける機能を揃えるため、前景の語りにおける完了形の例に限定する。

## 4. 語りにおける VS 構文の機能

### 4.1. 語りにおける VS 構文の特徴

本稿では、会話ではなく、物語における語りを資料として用いる。すでに文字化されており観察が容易であり、会話における相互作用という複雑な要因を排除できるからである。同様の理由から、本稿では、物語の会話内の VS 構文も分析対象から除く。また、hatta:《～まで》や, baſdma:《～の後》などの接続詞に後続する場合は、主語がある場合はほとんど常に VS 構文として現れるようであるため、これも除外した。「だれも～ない」という否定文で《だれも》が動詞の後に現れるものも除外した。結果として、本稿の分析の対象となる、物語の地の文に現れた VS 構文は 117 例となった。VS 構文は全体として 151 例であるから、その 3 分の 2 以上の VS 構文が本稿の対象ということになる。これらの 117 例のうち、大部分の動詞は自動詞 (107 例) であった<sup>16</sup>。動詞形はほとんどが完了形であった (未完了形は 8 例)。主語については、有生物と無生物の割合がほぼ半分 (それぞれ 59 例と 58 例) に分かれ、主語の有生性による偏りは見られなかったが、本稿で扱う語りの構造化の機能を持つ VS 構文の多くが有生物主語であった。

### 4.2. 前景の語りにおける「場面」「場面の主役」「場面転換」の定義

チュニス方言の VS 構文の機能を論ずるに先立ち、この機能に関わりがある「場面」「場面の主役」「場面転換」についてまとめる。

物語は、物語の本筋をなす前景の語りと、その背景をなす後景の語りとに分かれる (Hopper 1979)。前景の語りによって語られる本筋は、通常いくつかの部分 (例えば「起・承・転・結」のような部分) からなる。これらの本筋を構成する部分が「場面」である。

物語において、前景の語りは主要な存在を中心にして語られる。物語上もっとも中心的な存在は「主人公」と呼ばれる。主人公は本筋を構成するすべての場面において中心となるわけではなく、物語の必要に応じて場面ごとに中心的な存在が設定されることもある。こうした場面ごとの中心的存在を本稿では「場面の主役」と呼び、物語の主人公と区別する。

場面はたいてい物語の本筋の一部を含むが、その場面に割り当てられた本筋の展

<sup>16</sup> 数少ない他動詞の例が (3) の 2 番目の VS 構文である。

開を担うのが「場面の主役」である。それゆえ、「場面の主役」は人間や動物などの有生物、もしくは物語上、有生物扱いされた存在であると考えられる<sup>17</sup>。「場面の主役」は、部分的な本筋の展開を担うがゆえに、場面を規定するもっとも重要な要素である。場面が展開する時間や場所も、「場面の主役」ほどではないが、場面を規定する重要な要素である。したがって、場面とは「だれがいつどこで本筋を展開するか」によって規定されることになる<sup>18</sup>。

こうした場面の規定から、物語における「場面転換」もまた定義できる。すなわち、場面を規定するのが「だれが・いつ・どこで」である以上、これらの諸要素のいずれかが変更されることが「場面転換」ということになる。場面を規定する要素のうちもっとも重要なのが「場面の主役」であることを考えると、「いつ」「どこで」よりも「だれが」の変更がもっとも「強い」場面転換であると考えられる。

#### 4.3. VS 構文による場面転換

物語「ランプよ、ランプ」では、場面転換のきっかけとして VS 構文が用いられていることが観察される。まず、「場面の主役」が転換する場面転換を見る。「場面の主役」の転換では、時間や場所といった場面の他の属性は変わらないが、多くの場合、VS 構文をきっかけに、場面の展開を担う中心的存在が別の人物に入れ替わる。典型的には、VS 構文の後にそれと主語が一致する V 構文が後続する。次の (3) は (2) の再掲である。

- (3) **dxal**                      **l-afru:s**      la:      kla:m   la:      sla:m  
 入る PERF.3SG.M   DEF- 花婿   NEG 言葉   NEG 挨拶  
 s<sup>ʕ</sup>alla:                      rakʕti:n   w-za:  
 礼拝する PERF.3SG.M   2回      そして - 来る PERF.3SG.M  
 ʕa-l-bank                      w-tmadd                      rqad  
 の上 -DEF- 長椅子      そして - 横になる PERF.3SG.M   寝る PERF.3SG.M  
**nahha:t**                      **hi:ja**   **hwa:j3-ha:**      w-t<sup>ʕ</sup>alfat  
 脱ぐ PERF.3SG.F   彼女   着物 - 彼女の      そして - 上がる PERF.3SG.F  
 raqdit                      fi-l-farʕ  
 寝る PERF.3SG.F      の中 -DEF- ベッド  
 「(娘が男の家で待っていると) [VS] 花婿 (= 男) がひとと言も言わず入ってきた。[V 彼は] 2回礼拝をした。そして [V 彼は] 長椅子に上がった。[V 彼は] 横になった。[V 彼は] 寝た。[VS] 彼女 (= 娘) が着物を脱いだ。そして [V 彼女は] ベッドに上がった。[V 彼女は] 寝た。」 [p11, L12]

<sup>17</sup> Hopper (1979: 217) では、前景の語りにおいては有生物、特に単数の人間が動作主となりやすいとの指摘がある。

<sup>18</sup> 場面の定義は、ここに述べたものよりずっと複雑になるうが、本稿においては差し当たり十分である。



## 「[VS] 彼女の母が彼女の家に帰った。」 [p16, 1.2]

(5) の前の文脈では、VS 構文 (p15, 1.3) で「母」が「場面の主役」として設定されたのち、娘の嫁ぎ先での「娘」との会話が展開されている。(5) では、再び「母」を主語とする VS 構文を用い、場面の場所が「母親の家 (娘の実家)」に移行したことを示している。

場面の場所は必ずしも場所の移行によって設定されるものではない。(4) の「男がやってきた」ことを述べる VS 構文では、場面の場所が変わっていないことが示されており、これも場所の設定と見ることができる。第 5 節で確認するように、VS 構文に現れる動詞が移動もしくは場所を指定するものが多いのは、この場所の設定と関連しているとみられる。(1a) の VS 構文では、移動の動詞ではなく、“fi-θ-θni:ja” 「道すがら」という場所の副詞によって場所が設定されていることも確認できる。

場面の転換に関連して、談話的な場面転換に VS 構文が用いられた例も見ておく。次の (6) は、「ランプよ、ランプ」の冒頭部において「彼女 (母親)」を「場面の主役」として設定する VS 構文である。

- (6) **tixdim**                      **hi:ja** w-i:ja:-hum                      fi-s<sup>f</sup>-s<sup>f</sup>u:f  
 働く IMPF.3SG.F   彼女   そして - と - 彼ら   の中 -DEF- 羊毛  
 「[VS] 彼女が、娘たちと羊毛の仕事で働いている。」 [p.9, 1.7]

(6) の前では「3人の娘を残して夫の亡くなった貧しい女がいた。まったく身寄りのない状態であった」という定型句的な語り出しがなされ、その後、(6) の VS 構文によって、物語の本筋への導入となる女と娘たちの貧しい暮らしぶりが語られる。(6) の VS 構文は、未完了形であり、例文では省略したが、これに後続する未完了形の V 構文によっていつもの暮らしぶりという習慣的事態が語られる。この習慣的事態は物語の背景の説明となるものであり、後景の語りである。したがって、VS 構文は未完了形の場合は後景の語りにも現れうるということになる<sup>19</sup>。

これまで、「場面の主役」の設定を中心に見てきたが、次に「時間」の設定が単独で起きる場合を見る（「場所」の設定については、これが「場面の主役」を主語とする移動動詞によってなされることが多い以上、単独でなされる例はほとんどないと考えられる）。

- (7) qa:l                                      mli:h   ajja:   t'a:h  
 言う PERF.3SG.M   よい   さて   落ちる PERF.3SG.M

<sup>19</sup> 査読者より、後景の語りにおいて SV 構文だけでなく、VS 構文や V 構文も現れうるのか、そして、もし現れうるとすれば、その機能は前景の語りにおける機能と異なるのか、という問題提起があった。後景の語りをなす (6) は VS 構文であり、例文では省略したものの V 構文も後続しているため、後景の語りの種類によっては、VS 構文と V 構文も現れうるということになる。第 2 の質問については今後の課題としたい。

**l-li:l** rawwah

DEF- 夜 帰る PERF.3SG.M

「[V 彼は] 言った。『よろしい』 さて [VS] 夜が来た。[V 彼は] 帰った。」[p.55, 1.6]

(7) の夜の到来を述べる VS 構文は, (4) の最初の VS 構文と同一のものであるが, ここでは, 単に場面の時間が「夜」に設定されただけで, その前後では同じ登場人物「彼」を主格とする V 構文が現れ, (4) のように「場面の主役」そのものは変ってはいない。この点からすると, VS 構文による (7) の場面転換は, 「場面の主役」も「時間」も (そして「場所」も) 変わる (4) の場面転換と比べて弱いものであると考えられる。

VS 構文による「いつ」の設定は, 常に時間に関係する表現であるとは限らない。次の (8) は「黒い商人」からの例であるが, 夕食から食後の茶飲み話へ, という時間の移行が, 「食卓が持っていかれた」ことと「お茶が置かれた」ことを述べる 2 つの VS 構文によってあらわされている。

- (8) hazz-u: l-id-da:r<sup>s</sup> δ<sup>s</sup>ajff-u:  
連れて行く PERF.3SG.M- 彼を に -DEF- 家 もてなす PERF.3SG.M- 彼を  
δ<sup>s</sup>ja:fa mta:ʃ-mlu:k thazzit it<sup>s</sup>-t<sup>s</sup>a:wla  
もてなし の -王 PL 取られる PERF.3SG.F DEF- 食卓 F  
that<sup>s</sup> it-ta:j ʃarbu:  
置かれる PERF.3SG.M DEF- お茶 M 飲む PERF.3PL  
tnahnhu: qa:l-lu: tilʃab-ʃi:  
くつろぐ PERF.3PL 言う PERF.3SG.M- 彼に 遊ぶ IMPF.2SG-IRR  
ʃ-ʃit<sup>s</sup>ranʒ  
DEF- チェス

「[V 彼 = 黒い商人は] 彼を家に連れて行った。王たちのもてなしで [V 黒い商人は] 彼をもてなした。[VS] 食卓が持っていかれた。[VS] お茶が置かれた。[V 黒い商人と客は] 飲んだ。[V 黒い商人と客は] くつろいだ。[V 黒い商人は] 彼に言った。『あなたはチェスはやりますか?』」 [p.114, 1.14]

#### 4.4. 場面転換を起こさない VS 構文

VS 構文が, 「場面の主役, 時間, 場所」の設定に常に関わるわけではない。次の (9) のような VS 構文は場面転換を起こさない。

- (9) ʃarbit hatta: rwa:t  
飲む PERF.3SG.F まで 渴きがいやされる PERF.3SG.F  
w-ʒra: ha:k-il-ma: fi:-ʃru:q-ha:  
そして -流れる PERF.3SG.M あの -DEF- 水 の中 -血管 -彼女の

w-tfarhdit

w-raḡṣat

そして - リラックスする PERF.3SG.F そして - 戻る PERF.3SG.F

fi:-ha: r-ru:h tfakkrit hmu:m-ha:

の中に - 彼女 DEF- 魂 F 思い出す PERF.3SG.F 悩み - 彼女の

「(娘が砂漠をさまよい、ようやく水たまりを見つける) [V 彼女は] 飲んだ。ついに [V 彼女は] 渇きがいやされた。そして, [VS] その水が彼女の血管を流れた。そして [V 彼女は] リラックスした。[VS] 魂が彼女の中に戻った (= 人心地がついた)。[V 彼女は] 自分の苦境を思い出した。」 [p.29, 1.12]

(9) の例を含む「場面の主役」は「娘」であり<sup>20</sup>、後続する V 構文の主格人称も共通して娘を指示している。この場面には 2 つの VS 構文が含まれており、いずれも「水が娘の血管を流れた」「魂が娘の中に戻った」という出来事を述べるものであるが、「場面の主役」の転換を引き起こさない。これらの VS 構文に後続する V 構文では、「娘」の指示が維持され、「場面の主役」はそのままである。

(9) のような無生物主語の VS 構文は場面転換に関わらないことが多いが、有生物主語でも場面転換を引き起こさない例 (10) もある。また、無生物主語でも場面の転換に関わるとみなせる例 (11) もある。

(10) daxlu: ʒ-ʒma:ʃa w-bu:ʃatʔu:f qa:m

入る PERF.3PL DEF- 全員 そして - お付きの人々 立つ PERF.3SG.M

z-zʔa:ri:t

DEF- 女性の喜びの叫び

「[VS] お付きの人々もろとも全員が (城に) 入った。[VS] 女性たちの喜びの叫びが上がった。」 [p.65, 1.14]

(11) mʃat bi:-ha: l-karru:sa barʔa ma:ʃja

行く PERF.3SG.F と - 彼女 DEF- 馬車 外に 行く . 能動分詞 SG.F

barʔa ma:ʃja wuqfit bi:-ha: fi:-zanqa

外に 行く . 能動分詞 SG.F 止まる PERF.3SG.F と - 彼女 の中 - 小路

「[VS] 馬車が彼女を乗せて行った。(馬車は) 遠くに進む。遠くに進む。[V 馬車は] とある小路で彼女を乗せて止まった。」 [p.11, 1.7]

(10) の最初の VS 構文は人々の入城を語るものだが、「人々」は有生物とはいえ、後続する VS 構文と同じく物語の情景のひとつとして語られており、「場面の主役」とはみなせないため、場面転換を引き起こさない。これとは反対に、(11) の馬車が「場面の主役」となりうるのは、この馬車に主要登場人物のひとりである「彼女 (娘)」が乗っていることが前提とされ、有生物と同じく物語の展開を担う存在と認識され

<sup>20</sup> より厳密には、2 人の姉のうちのひとり。

ているからである<sup>21</sup>。

VS構文が場面転換を引き起こすかどうかは、語り手がその主語を場面の展開を担う存在とみなしているかどうかに関わっている。有生物、もしくは有生的な存在が場面の展開の担い手となりやすいのであってみれば、(9)のような無生物主語のVS構文は、場面転換機能をもちにくいと考えられる。

## 5. 物語におけるVS構文による場面転換

本節では、前節で述べたVS構文の場面転換機能について、物語の前景の語り即して具体的に観察する。取り上げるのは物語「ランプよ、ランプ」の冒頭からの10ページ(p.9,1.1～p.18,1.16)の最初の娘(三女)が活躍する部分の前半である。登場人物は女(母親)、長女、次女、三女、男である(物語では長女と次女は区別されていないが、本稿では便宜的に区別する)。

以下の物語の本筋においては、「場面の主役」の転換に関わる有生物主語のVS構文のみ「」内に太字の日本語訳で示し、( )内で、次の主役の転換のVS構文までの物語の要約を述べる。実際のテキストには後景の語りが含まれているが、本節の目的は前景の語りの分析にあるため、本筋として前景の語りのみ論じ、後景の語りは省いてある。ただし、例文(6)によって始まる①の場面のみは、(6)のところで述べたように後景の語りと考えられる。

(物語の由来と冒頭の語り：夫を亡くした貧しい女がいた。女には3人の娘がいた。) (p.9,1.1～1.6)

- ①「(例文(6)) **女が娘とともに羊毛紡ぎの仕事をしている。**(p.9,1.7)  
(羊毛を仕入れて紡いでは市場で売る、そういう暮らしぶりだった。)
- ②「**ある日のこと、彼女(女)の前で男が足を止めた。**(p.10,1.2)  
(男は羊毛の出来に感心し、女に長女との結婚を求める。女は長女の婚礼の準備をする。)
- ③「**夕暮れに家の前に馬車が止まる。花嫁(長女)が準備ができた。**(p.11,1.6)  
(長女は馬車に乗り込み(例文(11))<sup>22</sup>、立派な家に連れて行かれる。)
- ④「(例文(3)) **花婿(男)がひと言も言わず入ってきた。**(p.11,1.12)  
(男は長女に触れもせず、長椅子で寝てしまう。)
- ⑤「(例文(3)) **彼女(長女)が着物を脱いだ。**(p.11,1.13)  
(長女は寝る。翌朝男は起き出して姿を消す(例文(17))。しばらくして買い物

<sup>21</sup> それゆえ有生的な存在や、擬人化された無生物なども「場面の主役」となりうる。たとえば「(魔法の)ランプが彼に答えた。」(p.19,1.1, 第5節の⑩の場面)。「声が彼女に答えた。」(p.29,1.15)「これらの身の回りの品々が飛び跳ねはじめた。」(p.32,1.7)、「ござがじっとしていた。」(p.32,1.9)などである。ここで訳で示したVS構文もまた、その後続く短い「場面の主役」として「ランプ」「声」「身の回りの品々」「ござ」を設定している。なお、この解説は2名の査読者の指摘により追加したものである。

<sup>22</sup> (11)は場面転換の例として4.4節で挙げたが、無生物主語なのでここでは除外しておく。

籠を運んでくる。)

- ⑥「彼女(長女)が目覚めました。(p.12,1.2)」  
(長女は買い物籠を見つけるが、料理道具がないので何もしない。)
- ⑦「(例文(4))夜がきた。男がやってきた。(p.12,1.5)」  
(男は長女が何もしていないのを見る。次の日も次の日も同じことが続き、3日目の夜、男は長女を離縁して女のところに帰す。しばらくして、男は再び女の前に姿を現し、次女に求婚する。次女は男の家に連れて行かれるが、やがて長女と同じように実家に帰される。三女はこの男の行為に怒る(例文(13))。男が求婚に来る。真相を知るために家に行くと、同じことが起きる。男が朝、買い物籠いっばいの食料を持ってきて、姿を消す。三女は、隠された台所を発見し、料理を作る。)
- ⑧「夜が来た。花婿(男)がやってきた。(p.14,1.10)」  
(男は食事が準備されているのを見て三女を妻とする。)
- ⑨「翌日、母親(女)がやってきた。(p.15,1.3)」  
(女は三女の幸せな暮らしを見る。)
- ⑩「(例文(5))母親(女)が家に帰った。(p.16,1.2)」  
(女は長女と次女に三女の幸福な様子を伝える。)
- ⑪「2人の娘(長女と次女)が嫉妬した。(p.16,1.6)」  
(長女と次女は、三女に意地悪を言う。)
- ⑫「もう1人の女(女)が行く。(動詞は未完了形)(p.16,1.14)」  
(女は三女に姉たちの言葉を伝える。)
- ⑬「三女がカッとなった。(p.17,1.1)」
- ⑭「夜が来た。花婿(男)がやってきた。(p.17,1.1)」  
(三女の冷たい様子を見る。ランプに話しかけて、ランプの返事によってその原因を知る。三女に解決を約束する。翌朝、娘に贈り物が届く。)
- ⑮「母親(女)がやってきた。(p.17,1.16)」  
(女は三女の幸せそうな様子を見て帰り、長女と次女の嫉妬がさらに掻き立てられる。)
- ⑯「その晩、男がやってきた。(p.18,1.2)」  
(男は三女と宴を始め、大いに楽しむ。いっぽう、2人の娘は、意地悪な計画を立てる。女は三女に伝える。)
- ⑰「その晩、男がやってきた。(p.18,1.13)」  
(三女の冷たい様子を見る。ランプに話しかけて、ランプの返事によってその原因を知る。三女に解決を約束する。)(~ p.19,1.3)

ここにあげた「場面の主役」の転換の VS 構文は、物語の一部に過ぎないが、この構文がもつ場面転換機能を見るには十分である。まず、⑬以外の VS 構文のすべてが、それに続く「場面の主役」を設定している。⑬は「三女」を主語とする VS 構文であるが、その直後に「花婿(男)」を主語とする VS 構文が続くため、後続

する V 構文は現れない。この場合、⑬のみでひとつの場面が構成されていると考える<sup>23</sup>。

VS 構文によって設定された「場面の主役」は、次の VS 構文で新たな「場面の主役」が設定されるまでの間、継続しうる。これは、④と⑤を含む (3) で示したとおりであり、他では①, ③, ⑥, ⑧, ⑩, ⑪, ⑫, ⑰がこれに該当する。これらはいずれも次の VS 構文までの間隔が比較的短いという点で共通する。

次の「場面の主役」転換の VS 構文までの間隔が長いこともある。その場合、VS 構文によって設定された「場面の主役」は途中で変りうる<sup>24</sup>。⑦以降の展開がその例であり、ここで扱った約 10 ページのうち、3 ページ弱を占めるが、この長い展開では、「場面の主役」は、はじめは男、次いで娘を返された母親、そして三女と転換している。これらの転換は VS 構文によるものではない。したがって、「場面の主役」の転換にはさまざまな手段があり、VS 構文はこの構文に固有な「場面の主役」の転換のみに用いられるということになろう。

この VS 構文に固有な「場面の主役」の転換の具体的な内容を示唆するのが、これらの VS 構文に現れた動詞の特徴である。①～⑰の VS 構文の動詞をみると、その多くが 3a: 《やって来る》(⑦, ⑧, ⑭, ⑮, ⑯, ⑰), wqf 《止まる》(②), dxal 《入る》(④), xlat' 《来る》(⑨), rawwih 《帰る》(⑩), mfa: 《行く》(⑫) のように移動や場所の指定に関係する動詞である。また、③は、最初の VS 構文の動詞が wqf 《止まる》であり、2つの VS 構文あわせて場所の指定を含み、①の xdim 《働く》については、例文 (6) で論じたように、談話的な場面の移行が行われている。そのため、移行や場所の指定が明示されていないのは、特殊な⑬を除けば、⑤, ⑥, ⑪のみとなる。これらは、場面の移行なく「場面の主役」の転換を行う VS 構文である。総体としてみれば、VS 構文による場面転換の典型例とは、「場面の主役」の移動・場所の指定を通じて場面の転換を行うものである。

「場面の主役」の転換の VS 構文に移動もしくは場所の指定が伴うことがあるという傾向は、「場面の主役」の転換の VS 構文が現れやすい文脈というものがあることを示している。物語「ランプよ、ランプ」の場面転換においては、こうした「場面の主役」の転換の VS 構文が、大きな役割を果たしているといえる。

## 6. 前景の語りにおける VS 構文と他の動詞文との違い

この節では、前節で論じた場面転換の VS 構文の機能を踏まえ、VS 構文がその

<sup>23</sup> ⑬の原文は “tʔalʔit itʔ-ʔuʔla tilʔab ʔla:-ʔa:r bu:-ʔils” という意味がはっきりしない慣用表現である。Marçais and Guiga (1958-1961; 3024, 1.14) は似た表現 “jaʔʔaʔ ʔla:-ʔa:r bu:-ʔils” (表記は変更した) をあげ、これに「カットとなる、怒りに我を忘れる」との訳を与えている。本稿の訳はこれに基づくが、⑬の VS 構文がこの構文となったのは、慣用表現であるということも関係しているかもしれない。

<sup>24</sup> そのため、⑦の後の⑧、⑨の後の⑩のように、ある VS 構文が「場面の主役」を設定したのち、それに引き続き展開で「場面の主役」が変わったため、その次の VS 構文で、同じ主役が改めて設定されるということも起こる。



ma:-ʕqal-ha:-ʃ

NEG- 認識する PERF.3SG.M- 彼女を -IRR

「[SV] 彼女は彼だとわかったが, [SV] 彼は彼女だとわからなかった。」 [p.120, 1.12]

これは複数の主題文が接続詞 w-《そして》によって連結される構文であり、主題文によってあらわされる出来事の対比<sup>26</sup>や同時的生起をあらわす(熊切 2019)。すなわち、主題文には、出来事を他の出来事との関係において述べる機能がある。SV 構文もまた主題文であるから、こうした「出来事を他の出来事との関係において述べる」機能をもつ。その一例が、(1b)の「黒い商人」と「彼」の会話の始まりとなる SV 構文である。(1b)は、「黒い商人」と「彼」という限定された登場人物の構成要素のうち、発言したのは「彼」ではなく「黒い商人」とあるという対比的関係を主題化を通して述べている。

こうした機能は SV 構文による場面転換にも見られる。前節で取り上げた⑦と⑧の間の長い展開において、「場面の主役」が三女に転換するきっかけとなるのは、以下の(13)の SV 構文によってである(以下の例の訳では SV 構文を太字の [SV] で示す。2番目の VS 構文は場面転換を引き起こさない無生物主語の VS 構文である)。

- (13) **itʰ-tʰufla**    **sʰ-sʰyi:ra**    **isty:a:ðʰit**    w-tʰaftʰaf  
 DEF- 娘    DEF- 小さい    憤る PERF.3SG.F    そして - 溢れる PERF.3SG.M  
 il-himm    ʕla:-qalb-ha:    qa:lit    l-umʰmʰ-ha:  
 DEF- 悩み    に - 心 - 彼女    言う PERF.3SG.F    に - 母 - 彼女の  
 「[SV] **末の娘 (= 三女) は怒った。**そして, [VS] 彼女の心は悩みで一杯になった。  
 [V 彼女は] 自分の母に言った。(これ以降, 三女が中心となる場面が続く)」 [p.13, 1.6]

(13)は、「ランプよ, ランプ」において、長女と次女が離縁された後にいよいよ三女が登場する場面のものである。三女の登場以前には、長女と次女の出来事が述べられ、これらの先行する出来事に対する反応として「三女が怒った」という出来事が SV 構文で述べられている。また、長女、次女、三女という限られたセットの人物を取り上げて「場面の主役」として設定するのも、関係において出来事を述べる SV 構文の特色である。(13)の SV 構文は前景の語りにおける「場面の主役」の設定の一種であるが、先行する語りからの分離において「場面の主役」を設定する VS 構文とは異なる。

### 6.3. 前景の語りにおける V 構文

ここまで見たように、前景の語りの VS 構文は、先行する語りから分離したもの

<sup>26</sup> アラビア語一般の対比的主題については Dahlgren (2009a) を参照されたい。



V構文もまた「場面の主役」の転換を引き起こすことがある。これには、大きく分けて2種類のものがある。ひとつは、動詞の意味そのものが「場面の主役」の転換を前提とするものである。その典型的な例は qa:l 《言う》である（以下の例ではこの動詞を太字で示す）。

- (16) qa:l-lu: ma:-faqt-ʃ ...  
 言う PERF.3SG.M- 彼に NEG- 目覚める PERF.2SG-IRR (中略)  
 ma:-hassit: ʃajj fi-l-li:l qa:l-lu:  
 NEG- 感じる PERF.2SG なにも に -DEF- 夜 言う PERF.3SG.M- 彼に  
 ʃajj qa:l-lu: amma:la ...  
 なにも 言う PERF.3SG.M- 彼に ならば (以下略)  
 「[V 大臣は] 彼 (王子) に言った。『目を覚さなかつたのですか? (中略)  
 夜中になにも感じなかつたのですか?』[V 王子は] 彼(大臣)に言った。『なんにもだ』 [V 大臣は] 彼 (王子) に言った。『ならば (以下略)』」 [p.55, 1.1]

(16) では、動詞 qa:l 《言う》のたびに主語が変わるが、このような主役の転換が可能なのは、qa:l 《言う》が相互交渉的な行為をあらわす動詞であり、主語が入れ替わるターンテイキングな活動を前提としているためであろう。

もうひとつのV構文による「場面の主役」の転換は、「場面の主役」の転換を前提としない動詞の場合に生じるものである。次の(17)は例文(3)の後半部分に後続する文を加えたものである。

- (17) nahha:t hi:ja hwa:jɔ-ha: w-tʰalʃat  
 脱ぐ PERF.3SG.F 彼女 着物 - 彼女の そして - 上がる PERF.3SG.F  
 raqdit fi-l-farʃ qa:m min-yudwi:ka  
 寝る PERF.3SG.F の中 -DEF- ベッド 起きる PERF.3SG.M から -翌日  
 ʃa-l-faɔr ya:b sa:ʃa-min-zma:n  
 の上 -DEF- 早朝の礼拝の時刻 姿を消す PERF.3SG.M しばらく  
 「[VS] 彼女 (= 娘) が着物を脱いだ。そして [V 彼女は] ベッドに上がった。[V 彼女は] 寝た。翌日早朝, [V 彼は] 起きた。[V 彼は] しばらく姿を消した。」  
 [p11, 1.12]

太字で記した箇所でききた「彼女」から「彼」への「場面の主役」の転換は、VS構文によらずに、V構文の連続の中でなされている。次節では、このような前景の語りにおけるVS構文とV構文との「場面の主役」の転換がどう違うかを、情報構造、とくに共通基盤マネジメントという観点から説明する。

## 7. 場面転換の VS 構文と語りの構造化

### 7.1. 語りの構造化としての場面転換

前景の語りにおける VS 構文・SV 構文・V 構文のうち、VS 構文には他の 2 構文にない特徴がある。それは、VS 構文の場面転換が、物語の本筋だけではなく、語るという行為そのものにも及ぶことである。

SV 構文は他の文との関係において出来事を述べる構文であるから、前景の語り内で働く構文といえる。同様に V 構文も、すでに設置された場面内で本筋を展開する。しかし、VS 構文の場面転換は、(6) で見たように本筋以外の場面転換にも関わる。これは「定型句的な語り出しから物語の導入部への移行」であり、物語の本筋の場面転換というよりも、語りの構造上の転換である。それゆえ、「場面の主役」の転換をもたらす VS 構文による分離は、物語上の区切りであると同時に、語りの区切りともなっている。

VS 構文のもつ「場面の主役」転換機能は、語りの区切りを設ける「語りの構造化」であり、これは書き言葉で段落に分けると同じ機能を果たす<sup>28</sup>。このように見ることで、本稿で扱った資料にみられる「場面の主役」の転換をもたらす VS 構文の機能について、「物語の本筋上の場面転換」と「語りの構造化としての場面転換」というふたつの側面から捉えることが可能になる。場面転換の VS 構文のこのふたつの側面を理解するのに有用なモデルが、次節で述べる情報構造モデルである。

### 7.2. 共通基盤コンテンツと共通基盤マネジメント

情報構造における共通基盤 (common ground) とは、コミュニケーションにおいて、コミュニケーションの参与者どうしですでに共有された情報と、コミュニケーションの進展によりさらに変容する情報についてのあり方をモデル化したものである。Krifka は、さらにこれを共通基盤コンテンツ (CG content) と共通基盤マネジメント (CG management) とに区別することを提案している (Krifka 2008: 246, Féry and Ishihara 2016: 4-5)。

共通基盤コンテンツとは、あるコミュニケーションでの共通基盤の最新の内容 (Féry and Ishihara 2016: 5) を指す。また、共通基盤マネジメントとは、この共通基盤コンテンツを発展させるやり方に関わり、「コミュニケーションにおける参与者どうしの、はっきりした関心とゴールについての情報」を伝達するものである (Krifka 2008: 246)。

Krifka は、共通基盤マネジメントの例として「疑問」をあげている。疑問とは、事実に関する情報を含まず、それゆえ共通基盤コンテンツには寄与しないが、なんらかの返答によって埋めるべき情動的欠落が問うた側にあることを問われた側に示

<sup>28</sup> 第 5 節で扱った 10 ページの『アル＝アルウィー物語集』本文 (p.9, l.1 ~ p.18, l.16) において、形式的段落 (つまり改行と字下げのある段落) は、28 個あり、そのうち、11 個 (①, ②, ④, ⑥, ⑦, ⑧, ⑨, ⑫, ⑬, ⑯, ⑰) が「場面の主役」の転換の VS 構文によるものであった。

す。この談話的な情報発信が共通基盤の「管理」に関わるものと捉える。Krifka (2008: 272) は、談話辞やイントネーションなども「共通基盤の構造」を生み出す共通基盤マネジメントに含まれうるとする。

これを物語の語りにあてはめると、共通基盤コンテンツにあたるのは、物語の本筋、およびその本筋を理解するために必要な背景である。また、もういっぽうの共通基盤マネジメントには、共通基盤コンテンツの確立のためになされるあらゆる手立てが含まれる。その手立てには、前景の語りと後景の語りの適切な配置・配分、登場人物の明瞭な差別化、本筋の際立たせ、ミスリーディングな情報の排除、すでに共有されている語りのパターンの採用、語りの様式化などがありうる。そして、本稿で取り上げた場面転換による語りの分節、および「場面の主役・時間・場所」の設定もこれに加えることができる。これらの手立ては、聞き手に物語を話し手の意図した形で伝えるために、語りをなんらかの仕方でも構造化する。コミュニケーション的には、語りの構造化は共通基盤マネジメントそのものといえる。

### 7.3. 共通基盤マネジメントと VS 構文の場面転換

共通基盤マネジメントという観点から、VS 構文による場面転換を捉え直すと、場面転換をもたらず VS 構文には、物語の本筋に関わる共通基盤コンテンツ的側面と、場面転換という共通基盤マネジメント的側面があることがわかる。共通基盤コンテンツは真偽条件に関わるものであるが (Krifka 2008: 272)、共通基盤マネジメントは真偽条件に影響を与えない。次の (13) ((3) の日本語訳) の 2 番目の VS 構文 ([VS] 彼女が着物を脱いだ。) を V 構文 ([V 彼女は] 着物を脱いだ。) に変更しても、語られる内容そのものは変わらない。

- (18) (娘が男の家で待っていると) [VS] 花婿 (= 男) がひと言も言わず入ってきた。  
[V 彼は] 2 回礼拝をした。そして [V 彼は] 長椅子に上がった。[V 彼は] 横になった。[V 彼は] 寝た。[VS] 彼女 (= 娘) が着物を脱いだ。そして [V 彼女は] ベッドに上がった。[V 彼女は] 寝た。[p11, l.12]

しかし、その場合、「娘」を主語とする VS 構文が表示していた「娘」が「場面の主役」となったという共通基盤マネジメント的新情報は失われ、寝ている「男」が主役の場面という不自然な設定のもとで、主役ではない娘の行動を追うという語りになる。「娘」の行動が聞き手の関心であるはずの文脈で、語り手が「娘」を「場面の主役」にしないのは、聞き手にとってわかりにくい。共通基盤マネジメント情報は、語られる内容そのものには関わりがないが、聞き手への理解度を左右するという意味で、語り方に関わりがあるといえる。

これとは逆に、語り手は、場面の内容や、聞き手の受け取り方を考慮して、共通基盤を積極的に「管理」せずに放置する (あるいは、放置という「管理」をする) ことにより、物語を進めていくこともありうる。例文 (17) において、「彼女」から「彼」への「場面の主役」の転換が、VS 構文によらず、V 構文の連続において

なされるのは、そのようなケースである。この場合、物語の流れ上、VS 構文によって分離的な場面転換を起こすと、かえって聞き手を惑わす可能性があるため、V 構文によって、展開のうちに「場面の主役」を転換したほうがより適切な共通基盤マネジメントができると、語り手が判断したのである<sup>29</sup>。

また、第5節でみたように⑦～⑧の間は、3 ページ弱 (pp.12, 1.5-14, 1.9) を占める長い展開が含まれ、「場面の主役」は、はじめは男、次いで娘を返された母親、そして、三女と転換している。これらの転換のうち、最後のものはSV 構文によるものであり<sup>30</sup>、男から母親への転換はV 構文によるものである。この転換もまた、上述のような「放置」マネジメントとして理解される。すなわち、⑦～⑧の展開においては、「長女の離縁」のあとに、「次女への求婚と離縁」という「長女」と同じ場面が繰り返されるため、新情報提示のVS 構文をいちいち用いると、場面の繰り返しという効果を阻害することになるのである<sup>31</sup>。共通基盤マネジメントの観点から場面転換のVS 構文を捉えた場合、ある場合には適切な「管理」であっても、別の場合には共通基盤の発展を妨げる不適切な「管理」となることもありうるのである。

## 8. 結論と課題

本稿では、アラビア語チュニス方言による物語におけるVS 構文が、物語の登場人物を主語とした場合に「場面の主役・時間・場所」の設定という点で場面転換を引き起こす、語りの構造化機能を持つ場合があることを論じた。

また、このような場面転換のVS 構文と、SV 構文とV 構文との前景の語りにおける違いについて検討し、場面転換のVS 構文は、文脈的に分離することで場面転換を、SV 構文は他の出来事との関連によって場面転換を、そしてV 構文は場面の展開において「場面の主役」の転換を起こすと考えられることを述べた。

さらに、「場面の主役」の転換のVS 構文について情報構造の観点から分析を行い、この構文が、語りの内容についての情報を伝達するという共通基盤コンテンツ的側面と、語り方についてのメタ言語的情報を伝達するという共通基盤マネジメント的側面をもつことを述べた。そして、場面転換のVS 構文が用いられる場合とそうでない場合があることについて、共通基盤マネジメントの観点から説明を行なった。

チュニス方言のVS 構文は、6.1. 節で論じたように、新情報をひとまとまりに提示する機能を持つ。例 (7), (8), (9), (10) において、場面に出来事をひとつひとつ配置していくのは、舞台が始まる前に、演出家が指示を通じて大道具・小道具

<sup>29</sup> その判断の根拠は、語られた状況を考慮に入れられない限り不明である。ここで例文の直後の文脈をみると、「男」が姿を消した直後に再び「娘」を主役とする場面転換が行われる (第5節の⑥を参照)。すなわち、全体として「娘」が主役となる場面が続くので、男を「場面の主役」にしてしまうと、聞き手の混乱を引き起こす、と語り手が考えたためかもしれない。

<sup>30</sup> 例文 (13) とその議論を参照されたい。

<sup>31</sup> 別の箇所のV 構文による「男」から「三女」への「場面の主役」の転換 (p.13, 1.13-14) についても、やはり長女・次女と同じ場面の繰り返しであるということから、ここでの説明が適用できると考えられる。

を並べるのに似ている。また、この劇場の比喻を続けるならば、演出家はさらに、登場人物を主語とする VS 構文によって、その「場面の主役」となる俳優を中心に据え、演劇を開始するのである。

舞台を構成する要素が共通基盤コンテンツの重要な要素とすれば、それらを舞台に配置するやり方は共通基盤マネジメントとなろう。同じ脚本でも演出家の経験、理解力、観客への観察力と信頼関係、注意力、教養、個性によって、上演されるものが大きく変わるように、語りにおける共通基盤マネジメントの仕方も語り手によって大きく変わりうる<sup>32</sup>。

本稿は、アル＝アルウィーという特定の語り手の資料に対象を限定しているため、本稿で得られた結論もまた、アル＝アルウィーが語った状況の共通基盤マネジメントを反映した限定的なものかもしれないが、本稿の結論は次のように他の資料でも確認できる。

チュニス方言の語りの記録には、言語学者による記録を含め、複数の刊行物がある。そのうち最古のもののひとつは、Stumme (1893) であり、これには、チュニス方言による物語と詩が収められている。そのうち、最初の3つの物語 (pp. 3-38) の VS 構文を検討したところ、本稿で述べたような場面転換でしばしば用いられているのが観察された。また、場面転換の VS 構文に用いられる動詞について、最初の物語「寡婦の子ムハンマド」(pp. 3-14) を調べると、第5節でまとめたような、移動、もしくは場所の指定に関する動詞が多く見られた。

ただし、この資料では、V 構文が用いられるような場面内の展開において VS 構文が使用されるという違いも見られた。特に、qa:l 《言う》などの主語が入れ替わるターンテイキングな活動において、しばしば VS 構文が見られた<sup>33</sup>。こうした違いが、本稿の結論の反証となるのか、それとも、共通基盤マネジメントの一環として理解されるのかを判断するには、Stumme (1893) などの物語記録の総合的な分析が必要となろう<sup>34</sup>。さらに、実際の語りの現場に赴き、そこで語られる生きた言語のありようと語り手と聞き手の身振り、表情、視線を観察し、それらの観察を通じて、共通基盤の発展過程をコンテンツとマネジメントの双方から捉えることも実りのある試みになろう。今後の課題としたい。

## 参考文献

- Dahlgren, Sven-Olof (2009a) Topicalization. In: Versteegh, Kees, Mushira Eid, Alaa Elgibali, Manfred Woidich, and Andrzej Zaborski (eds.) (2009), 501-508.

<sup>32</sup> Hopper (1979: 221) はまた、古英語において VS 節によって長い語りが分割される現象を指摘し、これを文体的な理由によるものと考えている。「文体」を共通基盤マネジメントのやり方のひとつとして捉えることが可能かもしれない。

<sup>33</sup> したがって「寡婦の子ムハンマド」における VS 構文の動詞はターンテイキングに関わる動詞と移動・場所を指定する動詞がその大部分を占めることになる。

<sup>34</sup> 査読者から、もうひとつの資料 IBLA (6e année 21 et 22 (1943) numéro spécial) の教示があったが、参照できなかった。

- Dahlgren, Sven-Olof (2009b) Word Order. In: Versteegh, Kees, Mushira Eid, Alaa Elgibali, Manfred Woidich, and Andrzej Zaborski (eds.) (2009), 725–736.
- Féry, Caroline and Shinichiro Ishihara (2016) Introduction. In: Féry, Caroline and Shinichiro Ishihara (eds.) *The Oxford Handbook of Information Structure*, 1–18. Oxford: Oxford University Press.
- Gibson, Maik (2009) Tunis Arabic. In: Versteegh, Kees, Mushira Eid, Alaa Elgibali, Manfred Woidich, and Andrzej Zaborski (eds.) (2009), 563–571.
- Holes, Clive (1995) *Modern Arabic: structures, functions, and varieties*. London/New York: Longman.
- Hopper, Paul J. (1979) Aspect and foregrounding in discourse. In: Talmy Givón (ed.) *Syntax and semantics*, XII, 213–241. New York: Academic Press. [https://www.researchgate.net/publication/242503579\\_Aspect\\_and\\_foregrounding\\_in\\_discourse](https://www.researchgate.net/publication/242503579_Aspect_and_foregrounding_in_discourse) [2021年7月アクセス]
- 熊切拓 (2018) 「アラビア語チュニス方言における主題化」『東京大学言語学論集』40: 119–133.
- 熊切拓 (2019) 「アラビア語チュニス方言において主題をもつ文の並列が意味するもの」『東京大学言語学論集』41: 155–179.
- Krifka, Manfred (2008) Basic Notions of Information Structure. *Acta Linguistica Hungarica* 55: 243–276. <https://akjournals.com/view/journals/064/55/3-4/article-p243.xml> [2021年7月アクセス]
- Marçais, William and Abderrahmân Guïga (1958–1961) *Textes arabes de Takrouïna II. Glossaire*. Paris: Bibliothèque de L'École des Langues Orientales Vivantes.
- Singer, H-R. (1984) *Grammatik der Arabischen Mundart der Medina von Tunis*. Berlin/New York: Walter de Gruyter.
- Stumme, Hans (1893) *Tunisische Märchen und Gedichte: Eine Sammlung prosaischer und poetischer Stücke im arabischen Dialekt der Stadt Tunis nebst Einleitung und Übersetzung*. Leipzig: J.C. Hinrichs'sche Buchhandlung.
- Turki, Mohamed (1988) *Abdelaziz Laroui, Temoïn de Son Temps*. Le Bardo: Édition Turki.
- Versteegh, Kees, Mushira Eid, Alaa Elgibali, Manfred Woidich, and Andrzej Zaborski (eds.) (2009) *Encyclopedia of Arabic Language and Linguistics* Vol. IV. Leiden/Boston: Brill.

執筆者連絡先：

e-mail: cyberbbn@gmail.com

[受領日 2020年12月31日

最終原稿受理日 2021年7月9日]

**Abstract****Structuring the Narrative: Function of VS Clause in Tunis Arabic**

TAKU KUMAKIRI

*Research Fellow of Graduate School of Humanities and Sociology, University of Tokyo*

This paper discusses the function of Verb-Subject order in the narrative of Tunis Arabic. When the VS clause appears in the foreground discourse and its subject is a character, it causes shift of scene by setting a central character of the scene, its place, and its time. The paper demonstrates how this VS clause functions by examining the actual narrative sample. This function of scene shifting is connected with the basic function of VS clause, which thetically presents new information in the context. On the basis of this view, this paper clarifies the functional difference of the VS clause, SV clause, and V clause in the foreground discourse of the narrative. Further discussion is made in terms of information structure. This paper argues that scene shifting VS clause has two functions—that of Common Ground content, which conveys the information of the narrative's content, and Common Ground management, which is concerned with narration itself. This framework explains exceptional shifts of scene without the VS clause.